

広島県東広島市 長者スクモ塚第1号古墳現地説明会



日 時 2026 年 9 月 26 日
所 在 地 広島県東広島市西条町御園宇
調査主体 広島大学考古学研究室
調査遺跡 長者スクモ塚第1号古墳
協 力 東広島市教育委員会文化課

はじめに

長者スクモ塚古墳群は広島県東広島市西条町御園宇にあります。西条盆地には広島県最大級の墳丘規模をもつ三ツ城古墳など、古墳時代を通して多くの古墳がみられます（第1図）。長者スクモ塚古墳群は西条盆地東南部の独立した丘陵上にあり、周辺低地との比高差は約 30mあります。現在は第1号古墳と第2号古墳が残っています。

広島大学考古学研究室では、2016 年に第1号古墳の地形測量調査を行い、2020 年度から継続的に第1号古墳の発掘調査を行っています。これまでの調査で、第1号古墳は墳丘規模が直径約 40mの円墳であることが明らかになりました。築造時期は古墳から出土した埴輪から古墳時代前期後半（西暦4世紀）であることが分かりました。墳頂部にある埋葬施設は、多量の粘土で木棺を覆った粘土槨とよばれるものです。第2号古墳をはじめ、西条盆地の古墳は伝統的に埋葬施設に箱式石棺を用いていました。第1号古墳はあえてその伝統を踏襲せず、ヤマト政権と共通した最新の墓制を採用しました。墳丘は大規模に土を盛って築造されており、赤色と白色の土を交互に盛っています。また、墳丘の中腹あたりに土手状に土を盛り、そこから上の盛土は水平に盛っていく工法で築造しています。このように質の異なる土を交互に積み上げて土手状の高まりをつくる工法は西日本の大規模な古墳で見られますが、西条盆地内では他に類がなく、高度な土木技術がもたらされていたと分かりました。



第1図 長者スクモ塚古墳群と周辺古墳 (1/8,000) (野島・有松ほか、2023)

1. 古墳の規模と墳丘形状

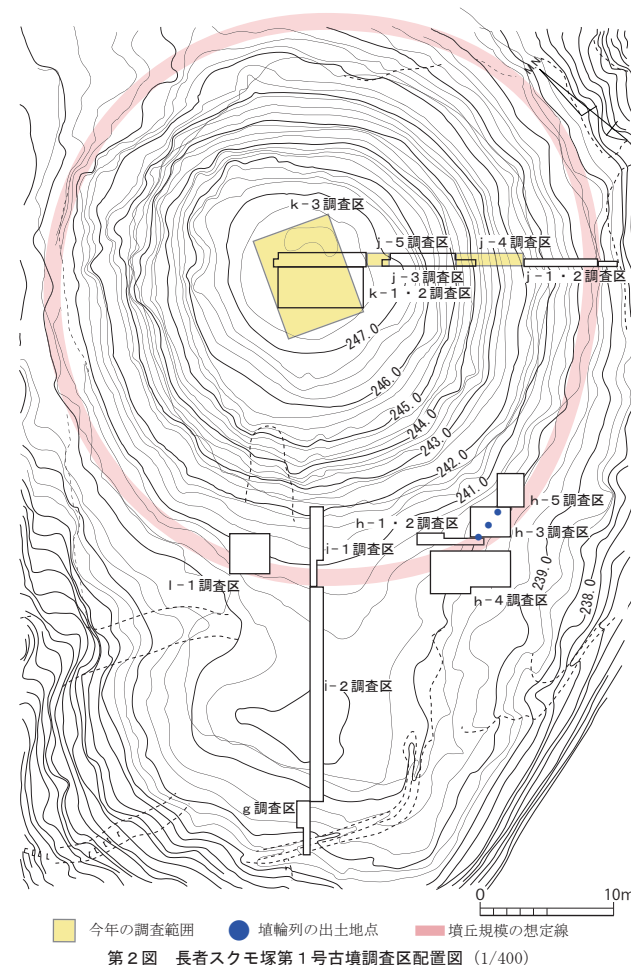
2016 年度に第1号古墳の地形測量調査を行いました。その時点では地形から第1号古墳は短い前方部をもつ全長約 60mの前方後円墳であると想定しました。

しかし、推定前方部の調査のために2021・2022 年度に推定前方部の中心部分を掘削した調査区（i-1・i-2）では、古墳の明確な構造物を確認することはできませんでした。また、これらの調査区と推定くびれ部を調査した調査区（h-4・1-1）では、埴輪片と同じ土層から鎌倉時代の土師質土器が出土し、この地点が鎌倉時代に大きく改変されていたことが分かりました。したがって、推定前方部は鎌倉時代の土地改変の結果、前方部のような形状にみえていたことが明らかになりました。

以上から、第1号古墳には前方部はなく、直径約 40mの円墳であることが分かりました。

2. 埴輪列

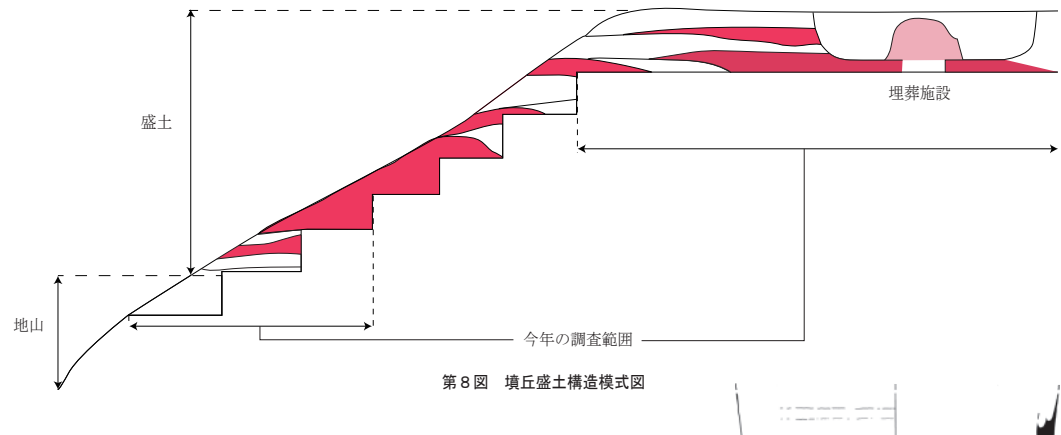
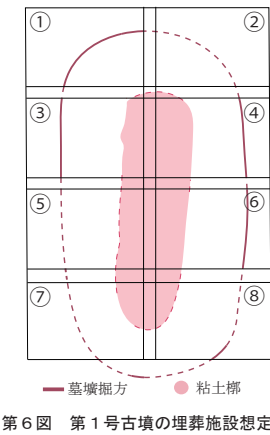
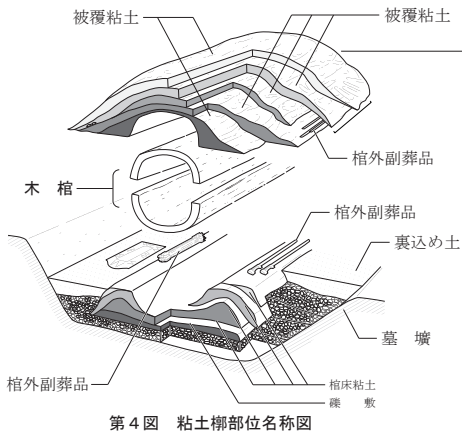
2020～2022 年度に調査した埴輪裾部の調査区（h-1・2・h-3）で3基の埴輪の樹立痕跡が検出されました（第2図）。この中で最も南側の埴輪では埴輪内に詰められた石と埴輪の底部が組み合った状態で出土しました（第3図）。北側の2基の樹立痕跡では埴輪の中に詰められた石のみが確認されました。2022・2023 年度に調査した隣接する調査区（h-4・h-5）では鎌倉時代の改変が及んでおり、埴輪の樹立痕跡は検出されませんでした。埴輪裾部の調査区で多量の円筒埴輪や朝顔形埴輪の破片が出土しました。そのため、本来は発見された3基以外にも埴輪裾部に埴輪列がめぐっていたと考えています。



第2図 長者スクモ塚第1号古墳調査区配置図 (1/400)



第3図 埴輪樹立痕跡検出状況



第7図 長者スクモ塚第2号古墳埋葬施設（野島・永野 2021）

第1号古墳の墓壇は長大で広島県最大級の墳丘をもつ三ツ城古墳の墓壇の長さを超えています。粘土柳も広島県では数が少なく、古墳時代前期ではほとんどみられません。西条盆地でも粘土柳は少なく、弥生時代からの伝統的な箱式石棺やそれを変形したような埋葬施設をもつ古墳がほとんどです。第2号古墳も中心埋葬に箱式石棺を採用しています（第7図）。また、西条盆地の古墳の多くは埋葬施設が2基以上ありますが、第1号古墳は1基しか埋葬施設が確認されていません。このように、第1号古墳の埋葬施設は西条盆地の伝統的な埋葬施設や地域の特徴を踏襲しておらず、ヤマト政権とのつながりを示す新しい墓制を採用した点で特徴的です。

4. 墳丘盛土

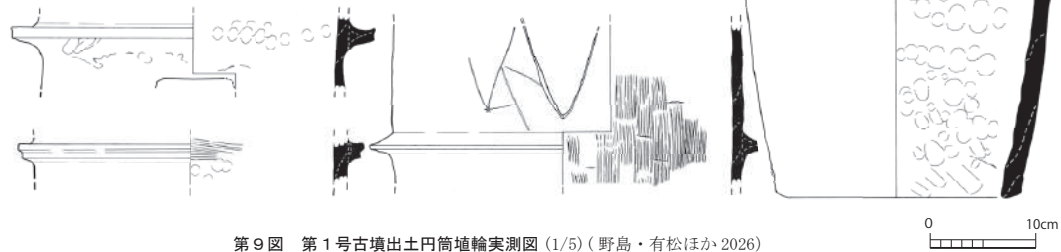
墳丘の構築方法を確認するために墳丘の東側斜面を調査した調査区（j-3）では、赤と白の土を交互に盛って墳丘を構築していることが分かりました。この赤と白の土は色だけではなく、土のしまりの強さや礫の入り方が異なります。このように性質の異なる土を交互に使うことで墳丘の排水を良くし、古墳が崩壊するのを抑止しようとしたと考えられます。また、墳丘の中腹あたりに土手状に土を盛り上げ、そこから墳頂部にかけて水平に盛土をする工法を用いています。

墳丘盛土は標高約242mから約247mで確認できます。第1号古墳の高さは地形から6.5m～7.5mであると考えられていますので、現在確認できる古墳の高さのうち約7割は盛土を積み上げて構築していたことが分かります。また、墳頂部は後世の改変により削られた可能性が高いため、当初の墳丘は現在確認できるよりも高かったと考えられます。

3. 埋葬施設

第1号古墳の埋葬施設は木棺を粘土で覆った粘土柳（第4図）であることが明らかになりました。粘土柳は近畿地方から東日本を中心に全国で見られます。近畿地方の王墓などで古くからみられる竪穴式石室に対して、粘土柳は4世紀に新しく用いられるようになる埋葬施設です。

第1号古墳の埋葬施設は1基確認されており、墓壇規模は南北約8.1m、東西約3.9mです。粘土柳は、一部が後世の攪乱で破壊されていますが、非常に残りの良い状態で残されている部分もあります。残りの良い部分では粘土を棒で叩いて固めた時の痕跡も残されています（第5図）。

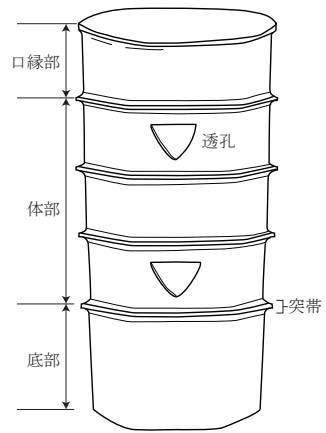


第9図 第1号古墳出土円筒埴輪実測図（1/5）（野島・有松ほか 2026）

5. 出土遺物

墳丘裾部や墳頂部では多くの埴輪が出土しています（第9図）。出土した埴輪の種類は、ほとんどが円筒埴輪か朝顔形埴輪の破片です。墳頂部では埴輪の樹立痕跡は確認されていませんが、攪乱坑などから埴輪が出土していることから墳頂部にも埴輪が置かれていたことが明らかになりました。第1号古墳で出土した埴輪では突帯の形状などの製作技術に種類がみられます。このことから、第1号古墳の埴輪を製作した集団はひとつではなく、いくつかのグループに分かれていた可能性が高いと考えています。出土した埴輪は逆三角形の透かし孔をもつなど、古墳時代のなかでも古い時期の埴輪の特徴をもちます。このような埴輪の形状や製作技術から埴輪は古墳時代前期後半に製作されたと考えています。

埴輪の他に墳頂部の攪乱坑内から鉄器片や勾玉などが出土しました。一部の鉄器は鉄剣片であると考えています。元々は粘土柳内か粘土柳の隣に副葬されていたものが後世の乱掘で周囲に飛び散ったと考えられます。



第10図 円筒埴輪各部の呼称

引用・参考文献

- 下江裕貴・永野智朗・藤澤昌弘 2018 「東広島市長者スクモ塚第1号古墳測量調査」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第10号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、41～70頁。
- 野島 永・永野智朗 2021 「東広島市長者スクモ塚第2号古墳発掘調査報告（第2～4次調査）」『広島大学大学院文学研究科広島大学考古学研究室紀要』第12号、広島大学大学院人間社会科学研究所考古学研究室、1～42頁。
- 野島 永・有松 唯・宇野真太郎・竹田千紘・船越雅子 2023 「東広島市長者スクモ塚第1号古墳発掘調査報告（第6次調査）」『広島大学大学院文学研究科広島大学考古学研究室紀要』第13号、広島大学大学院人間社会科学研究所考古学研究室、79～109頁。
- 野島 永・有松 唯・船越雅子・宇野真太郎・竹田千紘 2026 「東広島市長者スクモ塚第1号古墳発掘調査報告（第7次調査）」『広島大学大学院人間社会科学研究所 広島大学考古学研究室紀要』第14号、広島大学大学院人間社会科学研究所考古学研究室、1～28頁。

k-3 調査区全体状況（北より）



被覆粘土に残された圧痕（k-3 調査区）



墓壇の掘り込み状況（k-3 調査区）



j-4 調査区全体状況（東より）

